『國民新報』1939年6月4日

國民皆學と三皆[[1]](#footnote-1)

　は、二十五より、九ののをした。これはのとみるべきであつてになことである[。]いはゆるのおだ。

　々ののはにあるので、これなしにはも參もまらぬのはのこと、にたづさはることもないのである。かゝるなが、ので、のにされたことにのきをゆる、とふのはののにして、がにし、することのにきくなるかをすことになるからである。ひへれば、はにとかカネとかふなをにめるのみならず、ににいてもにくすることをするのであつて、それはもさず、をばとしてにし、てのをせしめようとするありきをすこととなるのである。

　としてにす道はへきれないであつて、わがそのものがちにすことでなければならぬ。ととはのもので、これをに、しきはにへるのはつたたることふまでもないが、し、、と三つにけてゐるのであるが、このけにはな一をみしてゐる。それはのだ。のが、、、はふにばず、、、、、、そのもとはるるにるまで、それはのなのであつて、そのによつてらるるのとびととはろへののとしてするものであり、がのたるにふることさへもへのをしてのみなされるものである。のかゝる（に、のみにあらず）こそのであつて、やがてはあらゆるのふべきちなのである。

さて、、、の三はれも―ちにをいてゐるのであつて、十にのをみるとふこと、三十にととをするとふことと、するものである。たるものしく一、三にふるのをて、れかはるべきである[。]

1. 単行本『同胞に寄す』に収録されていない。 [↑](#footnote-ref-1)